

FDについて考えるin京都 ―第18回FDフォーラムに参加して―

FD委員会副委員長 平山祐一郎(児童学科)

今回のFDフォーラムのテーマ

公益財団法人大学コンソーシアム京都が主催する2012年度第18回FDフォーラムに参加した。立命館大学衣笠キャンパスにて、2013年2月23日(土)、24日(日)に行われた。両日とも小雪が舞い、風情を感じられたが、会場には熱い報告や真剣な議論が満ちていた。

第18回にもなり、常連の方々からはマンネリ化を指摘する声もあった。私自身はたった3回目の参加である。まだまだ新参者の域を出ない私には、多くの刺激と課題を与えられた有意義な2日間であった。今回のテーマは、「**学生が主体的に学ぶ力を身につけるには**」であった。

1日目は「**主体的な学びを支える仕組み**」(定員550名)と「**学生とともにすすめるFD**」(定員300名)という2つのシンポジウムが企画された。1つを選択しなければならない。本学には「新しい時代に向けての学生指導検討委員会」がある。そこでの検討事項の1つが「学生の声を聞く」というものである。私は後者を選んだ。

2日目は、13の分科会が用意された。第3分科会「**学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ**」(定員150名)を選んだ。「授業アンケート」は本学においても、他の大学においても、FD活動の中心的话题の1つとなっているためである。

どの企画にも定員がある。開催校の報告によると、ウェブ上での申し込みの出足が大変早かったそうである。たぶん、定員をかなり超えて受け入れて下さったのではないと思う。2008年にFDが義務化され、各大学もFD

活動には悩みを抱えているためであろう。本フォーラムの開催校および運営スタッフのみなさんに心より感謝したい。

なお、会場では撮影と録音は許可されたが、公表は認められなかった。率直な意見を述べ合いたい、という配慮からであろう。そのため、本報告も発言者の匿名性はなるべく配慮したい。また、失礼ではあるが、あまりまとまりのある議論はなされなかった。「唯一の正解(定番)がないのがFD活動」である以上、しかたのないことである。したがって、この紙面における報告も羅列的にならざるを得ない。断片的にでも、本稿の読者のお役に立つことができれば幸いである。また、パワーポイントによる発表や議論が主であったため、私の記録の不十分さあるいは間違い等があった場合はご容赦いただきたい。

第1日 なぜ学生参加か

京都は大学の街である。そのせいだろうか、京都の各大学のFD活動への取り組みは熱心かつ先進的に感じられる。そして、「FD活動への学生参加」、これが今、話題となっている。そもそも、FD活動の基本的なメニューは、①授業アンケート(授業評価)、②授業公開、③FD講演会、④FD研究会などである。本学でも、授業アンケートや授業公開が実施されている。また、夏休み中には全学で教職員研究会が行われたり、さらに、春休み中にも全学でFDフォーラムが企画されたりしている。

しかし、このシンポジウムのある報告者によると、①授業アンケート(授業評価)は、ほぼ実質的な意味がないという。学生は期末ごとに、どの授業でもアンケートに回答せねばならず、嫌気がさしている。教員は学生による数値評定や自由記述欄のことばにショックを受けている。そのため、せっかくの集計結果も放置してしまうことが多い。かける労力と金銭の割に得るものが少ないというのだ。②授業公開も参加者が少なく、教員どうしお互い形式的に褒めあうばかりで、意味が薄いという。③FD講演会も④FD研究会も参加者が少なく、参加するのは固定メンバーであり、新味がなくなっているという。私個人としては、授業アンケートも授業公開も、あるいはFD講演会もFD研究会も、有用であると評価している。しかし、それが様々な「コスト」に見合った成果につながっているかと問われれば、「？」である。

そこで、停滞するFD活動の1つの突破口として注目されているのが、学生参加型のFD活動である。今回は、立命館大学、京都文教大学、京都産業大学そして追手門学院大学の学生のみなさんの発表や演劇を見ることができた。その後、学生諸君と話す機会にも恵まれた。「関西ならではの」というと偏見かもしれないが、サービス精神に溢れ、堂々とし、好感が持てる学生さんたちであった。

学生参加型FD活動に対する印象

紹介された学生参加型FD活動には、サークル活動のような印象を持った。だが、彼ら彼女らは、「すぐに結果が出るものではないが、自分たちの活動により、授業が良くなったり、大学が魅力的になったりする方向にある。自分の属する大学に誇りが持てるようになった」と話した。また、「自分が成長する機会が多い」とも述べた。

今回、大変興味深かったのは、「不本意入学」と「偶然入学」という言葉である。前者は言うまでもなく第1志望ではない大学に入学したことをいう。後者は、大学が家から近いから、あるいは高校の進路指導の先生に勧められたから、何となく入学したことを指すそうである。どちらにしろ、入学しても満足感がなく、しかもその大学に魅力を感じ取れない場合、不登校や退学につながりやすいという。そのような状況で、学生FD組織があると、学生生活を充実させる1つの場になるという。自分が大学に関与しているという感覚(帰属感)が生じ、大学に何らかの変化が生じると達成感が湧くのだという。

本学で学生参加型FDを実施するならば

では、実際に学生参加型FDとはどのように運営されているのであろうか。報告を聞く範囲では、教員主導型、事務職員主導型、学生主導型の3つがある。そして、大学組織に位置づける(教育研究所内やFDセンター内等)場合とサークルや自治会に置く場合があるようである。本学で学生参加型のFD活動を開始するなら、事務職員主導型が適合するように思われる。本来、教員と学生は成績評価をめぐって緊張関係にある。さらに、本学は穏やかな学生が多いため、教員との直接的なやりとりは、学生にとって負担が大きいだろう。そこで、事務職の立場で主導してもらえば、活性化する可能性がある。ただし、学生と教員の間を取り持つのは、決して楽な仕事ではないので、FDセンター等の部署を設け、学生FDを含むFD専門職員が存在すれば理想的である。

報告資料によれば、現在、継続的に学生参加型FDを実施している大学は、最低でも約60あるようである。その中に女子大学は数校だけであった。女子大での学生FD活動の難しさを反映しているのだろうか。

繰り返しになるが、本学の学生の多くは大変穏やかであり、要求を強く表面化することはない。したがって、学生参加型FD活動の将来性は未知数である。そこでである女子大の報告を参考にしたい。その大学では、FD活動の中心は学生との茶話会であるという。お茶を飲み、菓子をつまみながら、学生や教職員が今後の大学の望ましい姿を話し合うというのである。そのようなやり方ならば、角の立ちやすいFDの話もしやすい雰囲気となるだろう。この方法は本学向きのように思われる。

基本はコミュニケーション

学生参加型FDを推進している教職員や学生の皆さんがよく言葉にしていたことで、記憶に残ったのが、「とにかくコミュニケーションが大切」ということであった。授業アンケートへの回答が、なぜ授業改善につながらないのかという不信感を学生は持っている。しかし、大学側は、授業公開やFD講演会、FD研究会を実施し、授業力・教育力向上の努力をしていることを丁寧に説明すると多くの学生は納得するという。一方、教員は授業アンケートの自由記述欄に、一方的なクレームを書かれ、腹が立ち、授業へのやる気を低下させてしまうことがある。しかし、授業や学生に対する思いを、茶話会などの場で、会話を通じて学生に伝え、学生も協力的な発言をするようになるという。同じく、学生の主張も、

そのような場で、直接「話し言葉」でなされると、教員も落ち着いて聞くことができ、自分の授業を振り返るきっかけを得られることがあるという。

第2日 授業アンケートの現状

2日目に参加した分科会「**学生による授業アンケートの現状と課題そして発展へ**」は、6名の発表者により行われた。大学教育の研究者、FD活動の担当教員、FD部門の担当職員、大学運営者などである。ここではそこでの発言を羅列的にまとめてみる。

まず、授業アンケートは無駄であるという意見について。ある発表者は、「天気予報をするから天気が良くなるわけではない」「放射能を測定すれば放射能がなくなるわけではない」と発言された。なるほど、授業アンケートをただで、授業が改善されるはずがない。あくまで改善するのは、授業アンケートの結果を受け取った教員である。なお、この発表者は「たかが授業アンケートくらいに考えよう」とも述べていた。確かに、そう思えば、肩の力を抜いて、自分の授業を振り返ることができる。

また、授業アンケートについては、学生が自由記述欄に書き込む内容のひどさが必ず話題になる。どの大学も「建設的な意見を」と呼びかけている。ある発表者の所属大学では、平成25年度からアンケートに学生の氏名を記入させるそうである。責任ある記述を求めているのだらう。どのような効果をもたらすか、大変に興味深い。

私見だが、自由記述欄に書かれたことにあまり強い影響を受けてはいけなく感じている。たとえば、「他の教科書に変えてほしい」という意見が書かれていたでしょう。もし100人の受講者のうち数人がそのように書いたとしたら、あくまでもそれは数パーセントの意見なのである。ただ、そのように書きこまれてしまうと、受講生の多くがそのように思っているのではないかと、教員は疑心暗鬼になってしまうのである。だが、使われている教科書に満足していたり、特に問題を感じたりしていない学生は、自由記述欄にあえてそうは書かないのである。右往左往しないように心掛けたい(と私は肝に銘じている)。では、このような意見を放置してよいのかといえば、そうではない。次年度の授業において、「教科書」について、学生に意見を聞いたり、感想を書かせてみたりすればよい。そうすれば使用中の教科書の不足点・問題点も見えてこよう。このようにコミュニケーション手段として授業アンケート、特に自由記述欄を活用したい。

ツールをどう生かすか

次にツールの問題である。クリッカー(リモコンのような回答用の機械)などを用いて、学生の理解を把握しながら授業を進める試みが始まっている。問題を出したり、授業内容を理解できているかを○×で答えさせたりするのである。ある大学では、教師が10分ごとに理解できているかを学生に尋ねているという。確かに、有効かもしれない。しかし、新しい機材や指導法は、学生が珍しがって興味を持つため、導入時には効果を上げることがあることに注意したい。なお、クリッカーなどを使わずに、学生の表情や様子を見て、授業が分かっているかを教師は判断できねばならない、という意見も出た。

また、授業アンケートを紙媒体からウェブに移行することも話題になった。なんといっても、紙媒体での授業アンケートは回収・入力・集計等で、労力・時間・お金がかかる。しかし、ウェブ上で学生が授業アンケートに回答してくれば、集計までが迅速に行われ、費用を大幅に節約できる。しかし、実際にウェブ化に踏み切った大学の報告者によると、「意外とお金がかかる」というのである。OSやブラウザがアップグレードされるたびに、システム調整が必要で、結構な物入りなのだそう。

しかし、「回答率の低下」がウェブ化の最大の問題点である。ある大学では、大学評価において、低回答率が問題となり、結局、紙媒体に戻したそうである。

授業アンケートに回答しないかぎり、その科目の成績が確定しない、あるいは大学のウェブサービスの一部が受けられなくなるなどのペナルティで対処するところもあるらしい。そこまですべきか判断に迷うところである。

回答率が低くても、回答内容が良ければそれで構わないのではないか、という意見もあった。実際、ウェブ上での授業アンケートの自由記述欄には、良い内容が多いという。学生が授業アンケートページにアクセスしている時間帯を見ると、深夜が多いそうである。落ち着いてゆっくりと授業アンケートに答えてくれれば、確かに建設的な意見や感想が出てくるのであろう。

質問項目をどうするか

ほぼ全ての科目が、期末に、しかも多項目でアンケートを実施することにより、回答が荒れることも問題視されている。質問項目を見ないで回答する学生もいるらしい。そこで、アンケートを実施する授業数を減らしてみる、あるいはアンケートの質問項目数を減らしてみる、というような負担軽減方法が考えられる。本学でも平成

25年度から実施授業数を減らす試みが始まる。有効な授業アンケートになることを期待したい。

また、ある大学では授業アンケートに約30の質問があるという。測定という観点からは、ある程度の項目数が必要だろう。しかし、回答負担が大きいと、回答の質が保証できない。そこで、ある大学では4+1項目にしたという。①理解できたか、②専念できたか、③興味や関心が広がったか、④教材や資料は適切であったか、という項目に答えた上で、総合評価として、⑤この授業を履修して良かったか、を尋ねるのである。項目数が少ない分、質問内容を吟味する必要はあるが、素晴らしいと思う。まず、回答負担が少ない。そして、総合評価⑤に対して、①～④のどの項目が効いているかを重回帰分析的に解析して、教員にフィードバックすれば、教員が何を改善すればよいのかが見えてくるからである。

東京家政大学のFDに対して思うこと

ある報告者が、「授業は教員のものという意識を捨てなければならぬ」と述べた。自分のものだと思えば独善的になる。授業改善のための他者からの支援も受けにくくなる。他者へのアドバイスもしにくくなる。

また、ある発表者は、最大の授業改善は「教員の採用」にあると述べていた。単に研究業績数で教員採用を決めるのではなく、授業力もしっかり評価しようというのだ。興味深い発想であるが、これも授業アンケートと同様に評価の観点がどれだけ妥当であるかにかかっている。

このフォーラムのアンケートに、「今後、取り上げてほしいテーマについて」という質問があった。そこには、

キャリア教育、初年次教育、教育の質の保証、教養教育、学生FD、授業支援、学習支援、双方向型授業、e-learning、大学院FD、教員評価、研究支援、新任教員研修、授業評価、組織的FD推進支援・トップマネジメント、発達障がい等の特別支援、大学職員とのFD連携(FD+SD)、大学連携FD、地域連携、高大接続、ICTを活用したFD、ゼミ運営、ピアサポート、芸術系大学FD、女子学生教育FD、短期大学FD、医療系専門教育FD、コーオプ教育(インターンシップ)、ハラスメント、海外のFD事例紹介、留学生支援・国際化、教員・学生のメンタルヘルス

という言葉が並んでいた。FDとは実に幅広い。

本学のこれからのFD活動はどうあるべきだろうか。FDは義務化されたのであるから、「やるなら、実のあることをやろう」とまずは腹を括ることであろう。本学の規模を考えると、ポイントを絞ったFD活動が求められるだろう。「戦線の拡大」は危険であるからだ。そして、「FD活動には正解や定番がない」とよくいわれるが、やはり、授業アンケート、授業公開、FD講演会、FD研究会などは基本メニューである。ここに、ほどよく学生参加の道を開き、穏やかでオーソドックスな活動を目指すべきだ(と思う)。「東京家政大学はオーソドックスなFD。オーソドックスなFD活動なら東京家政大学」といわれる日が来ることを「個人的には」期待したい。

以上、丸2日間、京都で「FD漬け」となった成果報告である。出過ぎたこと、生意気なことをたくさん述べたが、ご海容いただければ幸いである。

編集後記

京都FDフォーラムは、

1. FD活動の普及
2. 大学教育、授業改善に関する実践・研究報告、人的交流の場の提供
3. 京都におけるFD活動の情報発信

を目的として、1995年度以降、毎年開催されています(2000年度までは12月、2001年度以降は2月または3月)。全国の大学から1,000名を超える教職員が集う

国内最大規模のFD行事であり、FDに関する情報収集・情報交換のための貴重な場となっています。今号では、FD副委員長平山祐一郎先生による第18回京都FDフォーラム参加報告をお届けします。FDの現状、最新動向がヴィヴィッドに伝わるレポートです。ぜひご一読ください。